

## エミリ・ディキンソンの〈推敲途上の詩〉を話者とする 詩三篇とその発想の淵源

江 田 孝 臣

### 序

筆者は先に発表した論考において、エミリ・ディキンソンの作品中で最も多くの議論を呼んできた“My Life had stood - a Loaded Gun -” (764 / J 754) を取り上げ、一人称の話者が詩人でも人間でもなく、推敲途上的一篇の詩であることを論じた (江田1)。動植物ならいざ知らず、未完成の詩、すなわち「もの」が一人称の話者として語るというのは、文学史上にもあまり例がないと思われるが、筆者は続いて発表した論文において、ディキンソンの作品中に、ほかにも同じ趣向の作品がさらに3篇存在することを論証した (江田2)。この解釈の強みは、そのように読むことによって、ディキンソンの日常の詩作生活の実態がディテールを伴って鮮やかに浮かび上がってくることであった。これら4篇をフランクリン版の詩番号順に列挙する。

1. “He put the Belt around my life -” (330 / J 273)
2. “I cried at Pity - not at Pain -” (394 / J 588)
3. “Promise This - When You be Dying -” (762 / J 648)
4. “My Life had stood - a Loaded Gun -” (764 / J 754)

これらの作品には、〈推敲途上の詩〉が話者であるという点のほかに、いくつか重要な特徴がある。まず、上の1と4において、“my life”が一人称の代わりとして用いられていることである。それぞれ“me”と“I”に置換可能である。したがって明らかに特異な語法である。わざわざ尋常でない呼称に言い換えたところに、話者が人間ではないことを暗示しようとするディキンソンの秘めた意図を感じる。言うまでもなく、ディキンソンは大の謎々 (riddle) 好きであり、多数の「謎々詩」 (riddle poems) が存在するからだ。次に、1と4では、〈推敲途上の詩〉の作り手は、女性三人称ではなく、男性三人称で呼ばれている。これらの詩が、ディキンソンと彼女が作る作品との関係を扱っているとすれば、ディキンソンは自分のジェンダーを詐称していることになる。最後に、2と3において、“Heaven”と“Grave”が、それぞれ、詩人の部屋に置いてある、完成した詩稿と未完成の詩稿を分けて保管するふたつの箱 (に類したもの) を指しているらしいこと

である。これらの特徴は、同種の作品がほかにも存在するかどうかを探る際の手掛かりとなる。

そこで、まず、ディキンソンの全作品について、“my life”を含むものを探してみると、前述の1と4を除いて12篇あることが分かる（列挙すれば次の通り—38 / J 11, 266 / J 247, 338 / J 279, 346 / J 446, 355 / J 510, 357 / J 351, 546 / J 576, 719 / J 734, 757 / J 646, 1061 / J 858, 1188 / J 1123, 1773 / J 1732）。その多くは“life”を通常の「人生」あるいは「生命」の意味で用いているが、次の2篇では上記の1～4と同じく、“my life”が一人称代名詞の代わりに用いられ、〈推敲途上の詩〉が話者として語っている可能性がある。

5. “I felt my life with both my hands” (357 / J 351)

6. “If He were living - dare I ask -” (719 / J 734)

ところで、5においては、冒頭行中の“my life”が、続く第2連で“my Being”と言い換えられている。このことから、全作品について“my being”を検索してみると、やはり推敲途上の詩を一人称の話者とする詩が1篇浮かび上がってくる。

7. “He found my Being - set it up -” (511 / J 603)

以下では、これら5～7について、フランクリン版の作品番号順に詳細な読解を試みる。なお原文のほかに、文法上の理解を示すために日本語訳を添えることとする。

(1)

“I felt my life with both my hands” (357 / J 351)

I felt my life with both my hands	私は自分の命を両手で触った
To see if it was there -	ちゃんとそこにあるかどうか知りたくて
I held my spirit to the Glass,	私は自分の魂を姿見にかざした
To prove it possibler -	もっと可能性があることを証明したくて
I turned my Being round and round	私は自分の存在をぐるぐる回転させた
And paused at every pound	そしてがつんとぶつかるたびに静止して
To ask the Owner's name -	所有者の名前を尋ねた
For doubt, that I should know the sound -	その響きを忘れたかもしれないと思って

I judged my features - jarred my hair -	私は自分の容貌に判決を下した。髪をきしらせた
I pushed my dimples by, and waited -	えくぼを押しつけて、待った
If they - twinkled back -	もしきらきらと戻ってきたら
Conviction might, of me -	自分についての確信も戻ってくるだろう
I told myself, "Take Courage, Friend -	私は自分に言った「友よ、勇気を持て。
That - was a former time -	あれはもう過ぎたこと
But we might learn to like the Heaven,	しかし、われらはあの天国も
As well as our Old Home"!	われらの古巣同様、気に入るかもしれない！」

この詩は一見すると、一人の若い女性が、二度目か三度目のデートの日の朝に、不安と期待の入り混じった気持ちで、自室の姿見の前で化粧と衣服を入念にチェックしながら、ややもすると気持ちの萎えかける自分自身を、励ましているように読める。1行目の“my life”と2行目の“my spirit”は、9-10行目に“my features,” “my hair,” “my dimples”とあることから、体の一部を指していることはすぐに察しがつく。“myself”と置き換えることも可能である。5行目ではやはり鏡の前で体を回転させながら、衣服の背中の部分などを確認しているということになるだろうか。12行目の“Conviction might, of me -”は“Conviction of myself might twinkle back -”の省略である。話者は、自分の容貌についての確信（conviction）を取り戻そうとしているのだ。13-14行目は「前回の失敗に懲りずに勇気を持て」と自分自身を励ましていると取れる。

たしかに若い女性の初々しい恋心を歌った軽快で、ナイーブで、コミカルな詩ではあるが、そうだとしたら、この詩は英米詩の恋愛詩の伝統の中で、どれほどの価値を持ちうるだろうか。1800篇近い作品を書けば、このレベルの詩があって当然ということだろうか。

一方でこの詩には、素直に恋愛の歌として読むことを躊躇させる異質な要素が多すぎる。そもそもストレートな恋愛詩なら、体の部分部分を指して、わざわざ“my life,” “my spirit,” “my Being”と、なぜ言い換えなければならないのか。必然的な理由があるだろうか。また7-8行目もいささか不可解である。これが恋愛詩とするなら、“the Owner”は、鏡に映る体を所有する「私」と取らざるを得ない。鏡に映る、入念に装った、普段の自分ならざる自分を見て、その体の「所有者の名前」を尋ねてみるというのは、若い女性の自己愛の表現として秀逸だが（その場合「こんなにきれいな私って誰？」などとも訳せよう）、次行の“For doubt, that I should know the sound -”（「その響きを忘れたかもしれないと思って」）が理解できない。話者が人間であれば、自分の名前を覚えているか自信がないというのは、当然ながらありえない。一方、“the Owner”を、私の心を虜にした恋人を指すと取れなくもないが、その場合、首っ丈の恋人の名前を忘れかけているということになり、これは同様にありえない。三番目に引っ掛かるのは、末尾

の15-16行目である。“the Heaven”と“our Old Home”は何を指しているのであろう。前者は定冠詞がつく以上、キリスト教の天国であるはずがない。恋愛詩説に無理に引きつけば、恋人と会っているときの「天」にも昇るような気分と関連させて解釈できないこともないが、しかし、そうなるとこの作品は、ますます詩としての価値を下落させてしまうように思う。

それでは、擬人化された〈推敲途上の詩〉が話者として語っているとしたらどうか。「私」は、長い間、未完成の、あるいは見込みのない詩稿として、おそらくは“Grave”と呼ばれている箱に入れられたままになっていた。ところがある日、作者が「私」のことをふと思い出し、「私」の価値について考えを改めるといふ思いがけない事態が生じる。そして、近々、「私」を書きもの机の上に戻し、もう一度推敲してくれそうだと「私」は予感する。「私」は、不安まじりながらも、うきうきした気分で、あたかもデートに出かける前の女性のように、入念に身支度をチェックしているのだ。〈推敲途上の詩〉である「私」は、自分に“life”や“spirit”があるかどうかを確認しているわけだが、いずれも、作者の死後も生き続けるほどの作品なら必ず持っているはずの独自の「命」と「魂」を指していると考えればよい。7-8行目に関しては、「私」は、あまりに長い間放置されていたがために、自分の作者の名前を忘れかけていると理解することが可能だ。それで本番に備えて、鏡に映る自分自身に「所有者の名前を尋ね」てみるのだ。いや、実際に忘れたわけではないだろう。鏡に映る自分自身に、浮かれ気分で「あの人って、名前は何といったかしら？」と冗談半分に尋ねることで、長い間放置されていた鬱憤を晴らしているのだ。なかなかユーモラスではないか。したがって、心の中では、もうとっくに作者を赦しているのだ。

14-16行目について言えば、“That - was a former time -”（「あれはもう過ぎたこと」）は、前回の推敲時に、作者を手こずらせ、「見込みなし」（hopeless）の烙印を押されて“Grave”行きになった過去の苦い思い出への言及だろう。また“the Heaven”は、首尾よく次回の推敲を経て、めでたく完成品として納められるはずの、未だ見ない箱のことを指していると考えよう。反対に、それまで納められていた箱は、当該の詩にとっては長い時間を過ごし、おそらくは愛着さえも覚えるようになった場所であり、詩人がつけた不気味な呼称にもかかわらず、“our Old Home”と呼ばれているわけである。

こう解釈すると、この詩は“Promise This - When You be Dying -”（762 / J 648）によく似ていることが分かる（江田2を参照）。後者は、推敲途上で放置されたままの詩が、作者に対して、死ぬまでには必ず自分を完成させてくれと懇願する内容であったが、この詩においては、同様の境遇にあった詩が、推敲の再開を予感して、書きもの机に運ばれるのを心待ちにしている。この二篇は、詩作をめぐる連作詩の一部を成す姉妹篇とも呼べそうである。

## （2）

次の詩も、男性三人称の代名詞“He”と、“my Being”によって表わされる「私」を、「男」と

「女」としか取ることのできない読者には、恋愛詩の一変種と見えるかもしれない。しかし、この作品は、恋愛詩としては、最初に取り上げたもの以上に不可解である。

“He found my Being - set it up -” (511 / J 603)

He found my Being - set it up -	彼は私の存在を見出し、据え付けた
Adjusted it to place -	位置を調整した
Then carved his name - upon it -	それからその上に彼の名前を刻み、
And bade it to the East	東に行くように命じた
Be faithful - in his absence -	留守の間、貞節でいるようにと
And he would come again -	もし守れたら、琥珀の馬車で
With Equipage of Amber -	戻ってきて
That time - to take it Home -	そのときは家に連れ帰ってやろうと

冒頭行で“my Being”と呼ばれている「私」だが、その後は一貫して「もの」扱いされている。男が女を「据え付け」て、「その上に名前を刻む」とは一体いかなる意味であろうか。その上「東に行け」とは、どういうことか。2連目の「琥珀の馬車で / 戻ってきて」も、皆目見当がつかない。まさか「金持ちになって戻ってきて、求婚する」ではあるまい。おまけに、もし「私」が人間の女性だとすれば、「彼」の「私」への態度には、家父長的な横柄さが際立っている。女性読者なら強い反発を感じるだろう。

では、いっそのこと“my Being”を「もの」だとして読んでみたらどうか。第1連目は何らかの職人の仕事場を思わせる。材料を作業台（workbench）に「据えつけ」、「位置を調整し」、そして自分の「名前を刻む」。彫金師だろうか木工職人だろうか。いや、7行目に“Amber”とあるから、宝石細工師（lapidary）であろう。このような周到なヒントの与え方はディキンソンの多くの作品に特徴的である。しかし、もしこの詩が、Longfellowの“The Village Blacksmith”と同じような、19世紀の職人の仕事ぶりを描いたものだとすれば、何の教訓もない分だけ、Longfellow作品にも劣る駄作であろう。むろん、宝石細工師の仕事は暗喩に過ぎない。この詩も、また、詩人の推敲作業を主題としているのだ。すなわち、ここでは詩が宝石になぞらえられているわけだが、周知のように、ディキンソンは、“I held a Jewel in my fingers -” (261 / J 245)をはじめ、多くの作品で詩を宝石に喩えている。

詩人は長らく“Grave”のなかに放置していた「私」という未完の詩稿の「存在」に気づく。それを書きもの机の上に置き、真剣に推敲を始める。詩に自分の「名前を刻む」というのは署名す

るということではなく、いまだ陳腐さの残る詩稿を大幅に書き直し、詩人としての無類の個性を刻印することにちがいない。平たく言えば、いままで誰も書いたことのない作品に仕上げるということだ。しかし、いまだ完成したわけではない。詩人はまたしばらく時間を置いてから作業を再開することにし、〈推敲途上の詩〉には、「東に行って」しばらく辛抱強く待つように命じる。「東」とは、詩人の自室の東側の隅で、この詩が元いた“Grave”と呼ばれる箱が置いてある場所であろうか。それともそこには“Grave”とは別に、未完成だが「見込みのありそうな」詩稿を入れて置く、第三の箱があるのかもしれない。ともかく、詩人は「貞節に」していれば、「琥珀の馬車で / 戻ってきて、そのときは家に連れ帰ってやろう」と約束する。この「家」(“Home”)とは書きもの机のことにちがいない。詩人は書きかけの詩に、さらなる推敲を施すことを約束するのだ。このように解釈すると、この詩もまた、以前論じた“*He put the Belt around my life -*” (330 / J 273) とよく似た作品であることが分かる (江田2を参照)。だとすれば、「彼」すなわちジェンダーを詐称する詩人エミリ・ディキンソンが、一時的に推敲を中断して部屋を出て行くのは、掃除、洗濯、料理などの家事を片づけるため、ということになろう。だとすれば、「琥珀の馬車で / 戻ってきて」とは、いったん詩作から頭を切り替え、家事に勤しんでいるその合間にひらめくかもしれない珠玉のようなインスピレーションを携えて、自室に戻って来ることを意味していると解釈できる。

## (3)

次の詩は、上で論じた二篇よりもずっと厄介で、筆者にとっても未だいくつかの謎を残している。ただ、ここでも、“He”と“I”を愛し合う男女とする恋愛詩説は成り立たないと考える。そのような解釈が、多くの不可解な壁におつかって、八方塞りになることは必至であるからだ。まだしも、〈推敲途上の詩〉を話者とするメタ・ポエムとして解釈する方に脈がある。その主たる理由は、この種の作品に用いられる道具立ての大半が、この詩には揃っているからである。

“If He were living - dare I ask -” (719 / J 734)

If He were living - dare I ask -	もし彼が生きていたら、と私は敢えて問う
And how if He be dead -	そして彼が死んでいたらどうだろう、と
And so around the Words I went -	それで、私は言葉たちをよけて通った
Of meeting them - afraid -	面と向かうのが怖くて
I hinted Changes - Lapse of Time -	私は変化をほのめかした、時の経過を
The Surfaces of Years -	年月の表面に

I touched with Caution - lest they crack -      そっと触れてみた。ぱりっと割れて  
And show me to my fears -      私の怖れに私を会わせることがないように

Reverted to adjoining Lives -      そばにいる命たちの方を振り向き  
Adroitly turning out      墓と思った場所を片っ端から  
Wherever I suspected Graves -      手際よく裏返した  
'Twas prudenter - I thought -      その方がより慎重だと思った

And He - I pushed - with sudden force -      そして、彼は - 私が不安になって  
In face of the Suspense -      いきなりさっと駆け寄ると -  
"Was buried" - "Buried"! "He!"      「埋められていた」、「埋められていた」「彼は」  
My Life just holds the Trench -      私の命はその溝を抱え込んでいるだけ

ここでは、最初から、“He”を詩人、“I”を〈推敲途上の詩〉と仮定して読んでみよう。また、もし〈推敲途上の詩〉を話者とするメタ・ポエムであるならば、この詩の舞台は屋外ではなく、詩人の自室であるはずだ。その前提で読み進めることにする。

まず1-2行目が現在時制であり、後続の詩行が、最終行を除き過去時制であることが不可解だが、一応ここでは、ディキンソンは直接話法を用いて

"If He were living" - dared I ask -  
"And how if He be dead -"

と書いているつもりだと推定しておく。「私」は、「彼」が死んだことを知りながらも、「もし生きていたら」と仮定法過去で「敢えて問う」てみる（「彼」は作者だから、この詩はディキンソン得意の死後空想の詩の変種でもある）。しかし、その一方で、やはり「死んでいたらどうだろう」とも思う。「私」は、「彼」が死んだ事実を未だ受け入れられないでいる、と取ることができる。これは「私」が、未完の詩稿として、それらを納める専用の箱のなかに、長い間、放置されたままになっているからだ（この「箱」の名称については、後で考察する）。「私」は、作者に長い間会っておらず、作者の死（かのポストモダンの用語ではない）にも立ち会っていない。もちろん遺体も見えていないのだ。死んだというのは風の噂に聞いたにすぎない。「私」は、「彼」が死んだ事実を自分の目で確かめようと思立って、出かけた。そして、「私」は、「言葉たちをよけて通った」（“around the Words I went -”）のだが、その理由が、その言葉たちに「面と向かうのが怖くて」（“Of meeting them - afraid -”）というのだから不可解だ。この“the Words”「言葉た

ち」とは何かが問題だ。定冠詞があるから、1-2行目で「私」が直接話法で発した言葉を指すとまず考えられるが、自分がいま発したばかりの言葉を「よけて通った」というのは理解不能だ。その理由が「面と向かうのが怖くて」となれば、なおさらだ。ディキンソンのこの種の詩の場合、後述の“Lives”同様、「私」以外の詩稿たちを指すと考えるべきだろう（江田2を参照）。なぜ「面と向かうのが」怖いかといえば、この「言葉たち」が作者によって立派に仕上げられた作品たちであり、未完成の詩である「私」には、彼らと互角に交わる自信がないからだ。だから、「言葉たち」を遠目に眺めながら、「よけて通る」しかないのだ。とすれば「言葉たち」すなわち完成された詩稿が集まっている場所とは、ディキンソンによっておそらくは“Heaven”と呼ばれている完成稿保管用の箱（に類するもの）ということになる。

以上、第1連は何とか切り抜けられたが、2連目から難問が続出する。5行目に“I hinted Changes - Lapse of Time -”とある。誰に「変化をほのめかす」のか不明である。「言葉たち」(“the Words”)に対してと取るのは困難だ。「私」は彼らに「面と向かう」のを怖れて「よけて通った」のだから。“Lapse of Time”は、「私」が未完のまま放置されていた間の時間の経過と取るほかない。しかし、「年月の経過」がもたらした「変化」とはいったい何であろうか。続いて「年月の表面 / にそっと触れた。ぱりっと割れて / 私を私の怖れに合わせることがないように」とあるから、何か表面が脆い物質かもしれない。これについては、しばらく置いておく。

9行目に“Reverted to adjoining Lives -”（「そばにいる命たちの方を振り向き」）とあるが、この“Lives”は、最終行の“My Life”が一人称の代用であり、「私」を指していることから分かるように、同じ「詩稿たち」を指していると考えられる。こういう用法は、“He put the Belt around my life -” (330 / J 273)にも見られた。しかしながら定冠詞が見つからないことから、先に出てきた「言葉たち」(“the Words”)、すなわち完成された詩稿たちを指すのではない。だとすれば、「私」と同じく、作者の手によって未だ書き上げられていない詩稿たちではなかろうか。彼らもまた「私」の後を追って、同じ箱から抜け出してきて、「私」の背後に控えているのであろう。「私」は、彼らを「振り向き / 墓と思った場所を片っ端から / 手際よく裏返す」(“Adroitly turning out / Wherever I suspected Graves -”)のだが、これは、同類たちの激励を受けて、彼らの代表として作者の遺体を探すためである。「墓」(“Graves”)は現実の墓ではなく、没原稿や見込みのない詩稿を入れておくための箱（に類したもの）であるはずだ。どうやらひとつではなく複数個存在するらしい。「私」は「墓」の中のほかの詩稿を取り出しては、そのうちのどれかに作者が「埋葬されて」いないか調べているのだ。だとすれば、6-7行目の“The Surfaces of Years - / I touched with Caution - lest they crack -”（「年月の表面に / そっと触れてみた。ぱりっと割れないよう」）は、長い年月の間放置され、紙が劣化してしまった詩稿に言及していることが分かる。自分がひとりだと思ったときには、恐る恐る触れるだけだったが、背後に仲間がついていると知り、自分だけで作者の死体に向き合う「怖れ」(“my fears”)を「私」は克服することができた



のである。もう用心して「そっと触れる」必要もなくなり、「私」は手際よく「墓」のなかの原稿を「裏返す」。なぜ「裏返す」のかといえば、没原稿は原稿面を下にして入れてあるからだろう。

しかし、ここでふたつの疑問が浮上してくる。ひとつは未完の詩稿である「私」が、複数の「墓」と呼ばれる箱の中身を「裏返して」は、作者の遺体を探しているとするれば、そもそも「私」とその同類が抜け出して来た「箱」の名前は何か。「Grave」でも“Heaven”でもないとするれば、何と呼ばれていたのか。地下と天上の間であり、いまだ不完全な「私」すなわち“My Life”と、同類の“Lives”が入っていた場所だから、単純に“Life”と呼ばれていたとも推定できるが、今のところ確たる証拠はない。カトリック教徒の詩人なら“Purgatory”（煉獄）とでも呼ぶところだろうが、いくらピューリタニズムに反発したディキンソンとはいえ、そこまでは考えがたい。

二番目の疑問は、なぜ、詩人の「遺体」を探すために、「墓」に入れてある没原稿を片っ端から裏返すのか、である。実際、最終連にあるように「私」は、そのうちのひとつに「彼」が埋められているのを発見するのだが、なぜ完成稿ではなく、没原稿（あるいは未完の原稿）の入った箱をひっくり返して作者を搜索するのか。常識的に考えて、作者の「精神」や「魂」が残るのは、完成された作品のなかではないのか。没原稿は、いまだ陳腐さが残り、作者らしさが十分に「刻印されて」いないからこそ、「墓」に入れられているのではないか。

しかし、ここで未完の詩稿である「私」が、なぜ、作者を探し求めているのか、その動機をもう一度思い出してみよう。それは、作者が死んだという事実を受け入れるためであった。自分に納得させるためであった。そして、そうすることで、自分はこれからもずっと未完の詩であり続けるという辛い事実を甘受するためだった。3行目で「言葉たち」（“the Words”）と呼ばれている完成した作品たちが入った「箱」を、「私」が、なぜ「よけて通った」かといえば、そこでは「作者」が「生きている」からである。そのカモフラージュした言い訳が「面と向かうのが怖くて」（“Of meeting them - afraid -”）というのは、いかにもシャイなディキンソンらしいが、一方で、生身のエミリ・ディキンソンは死んでも、その「精神」と「魂」は作品のなかに生き続けると、間接的にほのめかしていることになり、これもいかにも自信家のディキンソンらしい。また、キリスト教を信じられず、自分は予めキリスト教の天国から締め出されていると感じていた詩人ディキンソンが、自分で命名したとはいえ“Heaven”という箱のなかで「生きている」とは、キリスト教に当てつけた、何とも辛らつで機知に富んだ皮肉ではないか！

「私」は、作者の死を受け入れるために、没原稿の入った複数の「墓」（“Graves”）を掘り返し、そのなかのひとつの詩稿のなかに作者が「埋められている」ことを発見する。つまり、数ある没原稿の中でも、この詩稿は、「作者」が、あるいは、その「精神」や「魂」が、「もっとも生きていない」すなわち「死んでいる」詩稿なのだ。「私」は、このもっとも出来の悪い詩稿の存在に

よって、作者の死という事実をようやく受け入れることができるのである。それこそが、作者の部屋を出られない「私」にとっての、作者の「遺体」なのである。ちなみに、このような奇抜な詩想の背後にも、ディキンソンの詩作生活の実態が顔をのぞかせているように思う。先に「墓」のなかに放置していた没原稿のことを、ある日ふと思い出してみると、今度は案外に悪くない詩に思えてくる、という作家には珍しくないだろう経験について述べたが、それとはまったく正反対のことも起こり得る。すなわち、かつて没にした詩稿のことを、ある日ふと思い出してみると、「墓」に放り込んだとき以上にひどい、恥ずべき詩に思えてきて、一刻も早く焼却すべく、「墓」のなかの没原稿を必死にひっくり返し始めるのである。これらの詩の行間からは、そんな作者ディキンソンの姿が浮かび上がって来る。

さて、最終行の解釈が残っている。“My Life just holds the Trench -”（「私の命はその溝を抱え込んでいるだけ」）とは何とも謎めいている。“Trench”はまず間違いなく“Grave”の言い換えだろうとは察しがつく。だが、動詞“holds”の用法が理解できない。これが、主語と目的語が入れ代わって、“The Trench just holds My Life -”であるならば、まだしも理解のしようがある。すなわち、作者が墓に埋められているのを発見し、作者の死という事実を受け入れた「私」は、自分が、未来永劫、完成した詩になれない運命を悟り、遅ればせながら作者に殉じて、同じ墓穴に自ら身を横たえ、そして、今もその状態にある、ということだ。しかし、実際には“My Life just holds the Trench -”である。「私の命はその溝を抱え込んでいるだけ」としか訳しようがないだろう。単純に、墓穴に埋められた作者の姿が、すなわち、もっとも出来の悪い詩の出来の悪さ加減が、強烈に目に焼きついて、今でも忘れられないということだろうか。あるいは、そんな恥ずかしい詩を書いたことが、一生涯（all my life）、忘れられそうにもない、ということだろうか。筆者にはそれくらいしか思い浮かばないが、正直言って、どちらの解釈にもあまり自信がない。16行目に“Twas prudenter - I thought -”（「その方がずっと慎重だと思った」）とある。これも唐突な詩句である。比較級“prudenter”の比較の対象が何であるかも見当がつかない。しかしながら、ディキンソンが得意とする「謎々詩」をいくつも読んだ経験からすれば、どうも、この一見どうでもいいような詩句に、案外、謎を解く鍵が隠されているような気がしてならない。

以上、完全に満足のゆく解釈を提出できぬまま、この詩の分析は中断せざるを得ない。部分的には的を射ているようでも、最終的にすっきりと理解できないのは、詩句のどれかの解釈が誤っているためであろう。しかしながら、筆者は、この詩が〈推敲途上の詩〉を話者としているという点だけは、まず確実だと思う。方向性だけは間違っていないと考える。以上の分析作業がヒントとなって、読者諸氏の誰かが「正解」を出してくれることを期待したい。

## 結び

以上、〈推敲途上の詩〉を話者とする作品三篇について見てきた。“He”と“I”が登場し、「私」

が“me”や“myself”の代わりに“my life”を用い、さらには詩中に“Grave”あるいは“Heaven”という語が登場し、恋愛詩にしては風変わりであったり、奇怪、不可解であったりする作品を見つければ、筆者は偏執狂的なくらいに、詩作についての詩、すなわちメタ・ポエムである可能性を追求してきた。では、“Heaven”以外に、上記のような道具立てのない次の詩はどう読めるであろうか。

“ Why - do they shut me out of Heaven? ” (268 / J 248)

Why - do they shut me out of Heaven?	彼らはどうして私を天国に入れてはくれないのか。
Did I sing - too loud?	私の歌声が大き過ぎたせいか。
But - I can say a little "minor"	でも、わたしはもう少し短調でも歌える
Timid as a Bird!	小鳥のように臆病に
Wouldn't the Angels try me -	天使たちは私を試験してはくれないだろうか
Just - once - more -	もう一度だけ
Just - see - if I troubled them -	私が迷惑かけるかどうかみて欲しい
But dont - shut the door!	でも、お願いだからドアは閉めないで
Oh, if I - were the Gentleman	ああ、もし私がああの白いローブの
In the "White Robe" -	紳士なら、そしてノックするのが
And they - were the little Hand - that knocked -	この小さな手なら
Could - I - forbid?	拒絶などできるだろうか。

第1連だけ見れば、これもまた〈推敲途上の詩〉が語っているのかと早合点してしまう。作者にさらなる推敲を拒まれ、いつまでも“Heaven”すなわち完成稿を入れておく箱にたどり着けない未完の詩が不満を漏らしている、あるいは自分の不運を嘆いているように読める。しかしながら、第2連、第3連と読み進めれば、これが、通説どおり、自分（ディキンソン自身）がキリスト教会に受け入れてもらえないことを嘆く種類の詩であることがすぐに明白になる（キリスト教の主要な教義を信じられないことの裏返しの表現であるが）。第1連だけでメタ・ポエムと思ったのは、錯覚だったのである。

しかしながら、この錯覚には、〈推敲途上の詩〉を詩の話者に仕立て上げるといふ奇抜なアイデアに、ディキンソンがどういう経路を辿って到達したかを伺わせるヒントが潜んでいる。

ディキンソンは、人間イエスには共感を感じながらも、とりわけ三位一体と復活の教義をどう

しても信じることができず、結局、正式の教会員となることなく生涯を過ごした。キリスト教徒でないということは、たとえ罪なく死んだとしても、キリスト教の天国には入れない、というより予め締め出されている、ということの意味している。ユニテリアニズムが支配的となったボストンと違い、ピューリタンの伝統が色濃く残る保守的なアマストにおいて、非教会員を貫くには、尋常ではない意志力を要し、強い孤立感を強いられたはずである。

一方、ディキンソンはある時点から詩作を天職と心得て、本格的に身を入れ始める。30歳前後からは、忙しい家事の合間や夜の自由な時間、そしてほかの人々が教会に出かける安息日を、存分に利用したにちがいない。その上、時間の浪費を強いる社交活動からも身を引いて、自分自身の部屋で、詩作に持てるエネルギーの大半を注ぎ込み始める。快適で能率的な執筆のために、彼女なりにシステマティックな手順と環境を工夫しただろう。書きもの机とその周囲を使いやすく整えるだけでなく、例えば、ベッドに横になっているときに浮かんだアイデアを書き留めるために、枕元のテーブルに簡単な筆記用具を用意するようなことも、他の多くの作家同様、当然しただろう。また、書いた詩稿をその出来に応じて、あるいは推敲の段階に応じて、数種類に分類して保管するための箱を、部屋の別々の場所に置いていたということも十分考えられるだろう。ディキンソンの二階の自室は、詩生産の工房と化した。

そんな詩作に勤んでいるある日、ふと、出来の悪い詩を入れてある箱から、長らく放置してあった詩稿のひとつを手にとってみる。書き起こしたときには、これはどう手を入れても、ものになりそうもないと決め込んで、没原稿として放り込んだのだが、しばらく時間をおいて、もう一度読んでみると、最初の印象とは違って、なかなか見込みのありそうな詩に見えてくる。あのときの自分には見る眼がなかったと少し悔やんでみる。そうなると、長らく放置されたことを、詩の方でも恨んでいるように思えてくる。なぜ、もっと早く推敲を施し、完成稿用の箱に移してはくれなかったのか、と不平を言っているようにも思えてくる。そんなふうには詩に感情移入しているうちに、自分も、かつての信仰復興運動の嵐のさなか、この詩と同じように、回心する「見込みのない」者として一方的に分類され、苦しい思いを味わわせられたことを思い出す。自分の信念を貫いたがゆえに、キリスト教の天国から締め出され、おまけに地上の共同体のなかでも疎外感に苦しまなければならなかった。その質はちがうけれども、この詩も同じような苦しみを味わったのだと同情してみる。そして、これもまた突然に、推敲を途中で中断された詩の立場になって、その苦しみについて書いてみたらどうなるかという、奇抜きわまるアイデアを思いついてしまう。出来の悪い詩を入れる箱を“Grave”と名づけ、完成稿を入れる箱を“Heaven”と呼ぶという考えも、ひょっとしたら、このとき生まれたのかもしれない。また、これは少し想像が過ぎるかもしれないが、「墓」から未完の詩を救い出す行為は、ディキンソンのなかでは、「復活」の観念と結びついてきたかもしれない。いささか冒瀆的なパロディーだが、ひそかに、その行為を“resurrect”と呼んでいたかもしれない。

この〈推敲途上の詩〉を話者とする一連の詩は、そのような過程を経て、生まれてきたのではないか。だとすれば、それは、ディキンソンの人生を大きく左右した信仰の問題と深く結びついていたのである（了）。

#### 引用・参考文献

Eda, Takaomi. "The 'Loaded Gun' as a Poem in the Process of Being Revised." *The Emily Dickinson Society of Japan Newsletter*. No. 27 (2008). Kyoto, Japan: The Emily Dickinson Society of Japan, 2008. pp. 9-10.

Franklin, R. W. ed. *The Poems of Emily Dickinson* 3 vols. Cambridge, MA: Harvard UP, 1998.

Johnson, Thomas H. ed. *The Poems of Emily Dickinson*. 3 vols. Cambridge, MA: Harvard UP, 1955.

江田孝臣. 「Emily Dickinson 注釈 (5) (F 764 / J 754) "My Life had stood - a Loaded Gun -"」. 『英文学』, 第94号, 早稲田大学英文学会, 2008年3月, pp. 118-109. (江田1と略記)

……………「エミリの詩の工房——推敲途上の詩を話者とする作品三篇について」. 新倉俊一編『エミリ・ディキンソンの詩の世界』, 国文社, 2011年3月, pp. 8-23. (江田2と略記)